令和三年度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

共通選抜　全日制の課程

Ⅱ　国　語

注意事項

1　開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。

2　問題は **問五** まであり、1ページから14ページに印刷されています。

3　答えは、解答用紙の決められた欄に、記入またはマークしなさい。

4　数字や文字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はっきり書き入れなさい。

5　マークシート方式により解答する場合は、その番号の ◯ の中を塗りつぶしなさい。

6　解答用紙にマス目（例：□）がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。

7　終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受検番号
番

問一　次の問いに答えなさい。

(ア)　次の1～4の各文中の――線をつけた漢字の読み方を、ひらがなを使って現代仮名遣いで書きなさい。

1　元気よく挨拶する。　　2　政権を掌握する。

3　惜別の念を抱く。　　4　無事に目的を遂げる。

(イ)　次のa～dの各文中の――線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの1～4の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

a　エンチュウの体積を求める。

1　ピアノをエンソウする。　　2　会議をエンカツに進める。

3　友人とソエンになる。　　4　ガンエンを料理に使う。

b　会員としてトウロクする。

1　富士山のトウチョウに成功する。　　2　伝家のホウトウを抜く。

3　熊がトウミンする。　　4　国会でトウシュが討論を行う。

c　公民館のキソクを守って楽しむ。

1　太陽の動きをカンソクする。　　2　ヤクソクを果たす。

3　管理に関するサイソクを定める。　　4　キュウソクをとる。

d　税金をオサめる。

1　関係をシュウフクする。　　2　ストーブにキュウユする。

3　運動会をケッセキする。　　4　毎日ナットウを食べる。

(ウ)　次の**例文**中の――線をつけた「に」と同じ意味で用いられている「に」を含む文を、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

例文　すでに支度を済ませた。

1　今朝は特に冷え込んだ。　　2　彼女は穏やかに話す。

3　景色に目を奪われた。　　4　寒いのに薄着で過ごす。

(エ)　次の俳句を説明したものとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

鵙の空書斎はひく、ありと思ふ　　山口　青邨

1　書斎で悲しげに鳴く鵙の声を聞き、狭い室内ではなく広い空こそが鵙にとっての居場所だと感じ、放つことを決意したさまを、「鵙」という語を句の頭に置くことで印象深く描いている。

2　しきりに鳴く鵙に誘われ、閉じこもっていた書斎から出て実感した秋空の雄大さと、季節の移ろいに気付かせてくれた鵙に対する深い思いを、「鵙の空」という語句で象徴的に描いている。

3　行き詰まっている自身の現状を、「書斎はひく、あり」という語句で明確に示すと同時に、広い空を飛んでいる鵙を見て抱いた自由への憧れを、明るい将来への希望を交えて描いている。

4　書斎に聞こえてくる鵙の声に、開放的な秋空の明るさや高さが想起されるとともに、書斎やそこにいる自身が対照的に意識された感慨を、直接的に「思ふ」という語を用いて描いている。

問二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「尼」は、自身で仏像を描き写した絵（絵仏）を寺へ安置して熱心に拝んでいたが、しばらく寺を離れている間に、その絵仏は盗まれてしまった。

尼悲しび嘆きて、堪ふるに随ひて東西を求むといへども、たづね得ることなし。しかるにこのことを嘆き悲しみて、放生を行ぜむと思ひて、摂津の国の難波のあたりに行きぬ。河のあたりに徘徊する間、市より帰る人多かり。見れば荷へる箱を樹の上に置けり。主は見えず。尼聞けば、この箱の中に種々の生類の音あり。これ畜生の類を入れたるなりけりと思ひて、1 必ずこれを買ひて放たむと思ひて、しばらく留まりて箱の主の来るを待つ。

やや久しくありて箱の主来れり。尼これに会ひて曰はく、「この箱の中に種々の生類の音あり。われ放生のために来れり。これを買はむと思ふ故になんぢを待つなり。」と。箱の主答へて曰はく、「これさらに生類を入れたるにあらず。」と。尼なほ固くこれを乞ふに、箱の主、「生類にあらず。」と争ふ。その時に市人等来り集まりて、このことを聞きて曰はく、2 「すみやかにその箱を開けてその虚実を見るべし。」と。しかるに箱の主あからさまに立ち去るやうにて、箱を捨てて失せぬ。たづぬといへども行き方を知らず。早く逃げぬるなりけりと知りて、そののち、箱を開けて見れば、中に盗まれにし絵仏の像おはします。尼これを見て、涙を流して喜び悲しびて、市人等に向かひて曰はく、「われ、前にこの仏の像を失ひて、日夜に求め恋ひたてまつりつるに、今思はざるに会ひたてまつれり。うれしきかな。」と。市人等これを聞きて、3 尼を讃め尊び、箱の主の逃げぬることをことわりなりと思ひて、憎みそしりけり。尼これを喜びて、いよいよ放生を行ひて帰りぬ。仏をば元の寺にゐてたてまつりて、安置したてまつりけり。

これを思ふに、仏の、箱の中にして音を出だして尼に聞かしめたまひけるが、あはれにかなしく尊きなり。

（注）放生＝徳を積むために、捕らえた生き物を放す行いのこと。
摂津の国の難波のあたり＝現在の大阪市周辺。
畜生＝鳥や獣、虫などの総称。

（「今昔物語集」から。）

(ア) ――線1「必ずこれを買ひて放たむ」とあるが、「尼」がそのように思った理由を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 絵仏を探す道中で、生き物の声がする箱を見つけ、放生を行って絵仏を盗まれた悲しみを癒すことを思いついたから。

2 盗まれた絵仏を見つけ出すことができず、放生を行おうと考えて訪れた場所で、生き物の声がする箱を見つけたから。

3 盗まれた絵仏の情報を得ようと訪れた市場で、生き物の入った箱が売られているのを見て、放生に最適だと気付いたから。

4 絵仏を盗まれた罪悪感を消すため、放生を行いながら歩いていたところ、樹の上に置かれた箱から生き物の声がしたから。

(イ) ――線2「すみやかにその箱を開けてその虚実を見るべし。」とあるが、「市人等」がそのように言った理由を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 放生のために箱を求める「尼」と、生き物は入れていないと主張する「箱の主」が争っていたから。

2 生き物の入った箱を譲ってほしい「尼」と、生き物を手放したくない「箱の主」が争っていたから。

3 自分が放生を行うべきだと訴える「尼」と、自らの手で放生を行いたい「箱の主」が争っていたから。

4 生き物の声がしたと指摘する「尼」と、何も入っていないとうそをつく「箱の主」が争っていたから。

(ウ) ――線3「尼を讃め尊び、箱の主の逃げぬることをことわりなりと思ひて、憎みそしりけり。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「市人等」は「尼」の話を聞き、絵仏の入った箱を取り戻した「尼」を祝福するとともに、「尼」の箱を盗んだ「箱の主」が放生に参加せず去ったのは当然だと非難した。

2 「市人等」は「尼」の話を聞き、盗まれた絵仏を見つけた「尼」をたたえるとともに、悪事を働いたことを悔やんだ「箱の主」が人知れず姿を消したのは当然だと非難した。

3 「市人等」は「尼」の話を聞き、絵仏を強く求め続けた「尼」を賞賛するとともに、「尼」の絵仏を盗んだ「箱の主」が逃げ出したのはもっともなことだと非難した。

4 「市人等」は「尼」の話を聞き、生き物の命を救った「尼」をほめるとともに、必要以上に生き物を捕らえていた「箱の主」が逃げたのはもっともなことだと非難した。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「仏」が応えてくれると信じて放生を行った「尼」は、絵仏を無事に取り返すことができたため、今後も熱心に絵仏を拝もうと心に決めた。

2 探していた絵仏を見つけることができた「尼」は、「箱の主」や「市人等」に放生を行うことの大切さを説いたのち、絵仏を寺へ持ち帰った。

3 「尼」は絵仏を盗んだ「箱の主」を許しただけではなく、ともに放生を行うことによって罪を悔い改めさせたため、「市人等」から尊敬された。

4 「仏」が箱の中から存在を知らせたおかげで、盗まれた絵仏を無事に取り戻すことができた「尼」は放生を行い、絵仏を元の寺に安置した。

問三　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

花火屋「鍵屋」の主人である六代目「弥兵衛」は、飢饉の影響を受けている江戸の町や人々を活気づけるため、数か月後に開催される水神祭で花火を打ち上げようと計画し、ともに働く「京次（京さん）」「元太」「喜助」「新蔵」も賛同した。「弥兵衛」たちは資金の援助を頼もうと、手分けして茶屋や屋台、船宿などに出向いたものの、良い返事は得られずにいた。

江戸っ子の心意気ってのを、忘れちまったのかねえ。何をするにも気持ちが第一じゃねえか。皆で元気を出そうってのに、何で分からんかねえ――不平不満が撒き散らされてゆく。弥兵衛も始めは同じ気持ちだったが、聞いているうちに少し違う思いが生まれてきた。

「……どうして。」

1 悪口雑言の飛び交う中、小声で自問した。

どうしてなのだろう。鍵屋の皆は、こう言ってくれるのに。分かってくれるのに。なぜ、茶屋や屋台には通じないのだろう。(注)西詰の店も同じだ。

今のご時世が悪いからには違いあるまい。が、そのせいだとばかり思うのは、いささか手前勝手に過ぎる気もする。

自分は、何か見落としていないか。

「茶屋も屋台も、しみったれたこと言いやがって。旦那はよう、世の中のためにやろうとしてんじゃねえか。」

「ねえ旦那さん。もう、やめちまいましょうよ。何が正しいか分からねえ奴らなんて、勝手に野垂れ死にすりゃいいんだ。」

京次と元太が怒りのやり場を探している。弥兵衛は二人の言葉をゆっくり噛み砕いた。

世の中のために。京次の言うとおり、自分はそのつもりである。

何が正しいか分からない奴らなど。元太の言うとおり、放って置いても良いはずだ。

だが。

正しいとは何だろう。

世のためとは、いったい何なのだろう。

分からなくなってきた。

作事場の面々はまだ言い足りないらしく、あれこれの文句を繰り返している。

うんざりしたように、(注)市兵衛が「うるせえなあ。」とぼやいた。

「おい元太。口動かしてる暇があったら、手ぇ動かせ。」

「そうは言うけどねえ、父っつぁんよう。旦那さんは世のため人のため、正しいこと、しようとしてんですぜ。なのに誰も分からねえなんて、情けねえたあ思いやせんか。」

「正しいとか何とかほざくならよ、おめえが何者か考えな。花火屋だろ。だったら夕飯の賄いまで、手ぇ動かして火薬作んのが正しいんじゃねえのかい。」

2 言われた元太はむっつりとした顔になり、そっぽを向いて「はいよ。」と応じた。

「父っつぁんの仰るとおりでごぜえます。手ぇ動かすのが正しい。ええ、正しいですとも。」

いつものやり取りである。だが、そんな珍しくもない言葉が、弥兵衛の胸に深く刺さった。

「正しい……か。ねえ喜助さん。元太さんも。あたしは、本当に正しいんですかね。」
俯いたまま問うた。元太は「え。」と言ったきり何も返せずにいる。
弥兵衛は「おや。」と何かを感じた。誰かの――左側にいる市兵衛の気配が変わっている。ここしばらく癇に障る物腰が続いていたのだが、どうしたのだろう。
そういう戸惑いを余所に、正面で背を丸める新蔵が、なよなよした声を寄越した。
「本当に正しいのかって、そんな。こないだの(注)銀六さんと仙吉さんでしたっけ。あの二人と旦那様の話……あっし、目頭が熱くなって仕方なかったんですから。今さら、あれが間違いだったって言われたら、どうすりゃいいんです。同じ気持ちで茶屋の人たちも誘ってんでしょう？　だったら正しいに決まってますよ。」
弥兵衛は俯いた顔を上げ、小さく笑みを浮かべて頷く。聞きたいのは、そういうことではなかった。
果たして自分は、本当に正しかったのか。
水茶屋も屋台の衆も、商いの何たるかを忘れている。人々の心が暗闇に押し込まれ、半年以上も上手く行かずにきたからだろう。鍵屋も他と同じ、去年の夏はろくに稼げず蓄えを吐き出し、切り詰めて切り詰めて、どうにかなっている格好だ。
それでも、自分は踏ん張ろうとしている。こんなご時世だからこそ、何を糞と歯を食い縛らねばならないのだ。父にそう育てられたし、努めてそう生きようと自らを戒めてきた。
だから、それで当然だと思っていた。しかし――。
「河原の蒲公英。」
ぽつりと漏れた。船宿を回った後の(注)大川端が、頭に蘇る。あの日、思ったではないか。お天道様の機嫌が直れば、野の草はまた花を咲かせる。だが、人はそう簡単ではないのだと。
「……そうだね。」
誰もが気を塞いだままでは、世の中は良くならない。これは確かな話だ。ひとりひとりが「やってやる。」の意気を持って、初めて全てが良い方に転がる。
しかし、だから自分と同じ心を持てと言って回るのは、違うのかも知れない。周りにいる皆、分かってくれる人ばかりを見て、そこを勘違いしていたのではあるまいか。
「正しい、か。そいつは……腹が立つだろうねえ。」
「へえ？」
市兵衛が口を開いた。
横目に見れば、七十も近い頬が少しばかり緩んだかに見えた。
それによって、胸を包んだ霧が晴れたような気がする。参った。これぞ年の功だ。

3 市兵衛はこちらの苦笑をちらりと一瞥し、それと分からぬくらいに頷くと、もそりと立ち上がって行灯に歩を進めた。

そうだ。自分は勘違いしていた。
このところ市兵衛の物言いに嫌気が差していた。しかし、ずっとそうだった訳ではない。水神祭で花火を上げよう、世の中を明るくしようと話した時には、他の面々と同じに奮い立っていたのだ。変わったのは、幕府から金が出ないと決まり、その分を皆から集めようと考えてからである。
両国橋西詰の店に金を出してくれと頼んだ。屋台を呼び、掘っ立て小屋を作って出店を募ろうとした。どちらも断られはしたが、間違いなく良案である。そして自分は正しかった。
しかし。花火屋なら手を動かすのが「正しい。」と言われた時の元太を見て、やっと分かった。自分は

いい気になっていた。良案を捻り出して、浮かれていたのだ。

何が正しいかは、きっと誰にも分かっているのだろう。とは言いつつ、踏ん切りを付けられるかどうかは人それぞれだ。同じでなど、あろうはずがない。自分が正しいからと言って、他人にも同じであれと押し付ける。それは、驕りだ。

4

「あたしは正しかった。でも、間違ってたんだ。」

誰も口を開かない。弥兵衛はぐっと奥歯を噛んだ。日が傾き、作事場は暗さを増している。左手の奥では、市兵衛がいつもどおりの顔で行灯に火を入れていた。

「あの、旦那様。あっし……どうしたらいいんです？」

新蔵が頼りなげに問う。不思議とおかしさが湧いてきた。

「はは……。ははは、はは！　あっははははっ。」

静かに漏れた笑いは、すぐに天を仰いでの大笑いに変わった。市兵衛を除いて皆が身を強張らせ、新蔵に至っては「うひぃ。」と腰を抜かしている。

弥兵衛は笑いながら「すみませんね。」と詫び、涙目の新蔵に向いて力強く言った。

「どうしたらも何もありません。やると決めたら、やるんです。明日も屋台回りですからね。それから小屋の方、材木の仕入れなんかも遅れないでくださいよ。こき使って申し訳ないけどさ。」

そして、ひとりずつ顔を見た。

「あたしと喜助さんは茶屋回りだ。元太さんに京さん、火薬は山ほど要りますから、まだまだ作り増してもらいますよ。市兵衛さんも、たっぷり星(注)を固めといてください。」

市兵衛が、にやりと笑みを見せる。元太と京次は、狐に摘まれたように「へえ。」と返した。

喜助から、戸惑いがちな問いが向けられた。

「やる、ってのは構わねえんですがね。後払いだの手間賃だのは、どうすんです。」

「聞いてやんなさい。当たり前でしょう。」

世に明るさを取り戻したい。そのために動こうと言うのなら、高みに立っていてはならないのだ。尻込みする者があれば、そこまで下りて行き、まず光明を見せねばならない。全ての人が自分と同じではないのだから。

5

「うちが全部被る羽目になるかも、ですぜ。」

市兵衛が釘を刺した。ただし、この上なく穏やかな声である。弥兵衛は「ええ。」と眼差しに力を込めた。

「しくじれば鍵屋は傾くでしょうけどね。それでも、やるんです。言いだしっぺは、あたしなんだ。出店を頼む相手だけじゃない、うちも懸命でなけりゃ……でしょう？」

「まあ、そうでさあね。」

市兵衛の物腰に、もう嫌なものは見えない。安堵したような眼差しだけがある。弥兵衛は自らを恥じる笑みで応じた。

（吉川　永青「憂き夜に花を」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）西詰＝橋の西側の端を指す。ここでは、現在の東京都にある両国橋の西端のこと。
市兵衛＝先代の頃から「鍵屋」を支えてきた職人。
銀六さんと仙吉さん＝「弥兵衛」が「鍵屋」へ呼び、夕飯をふるまったことのある町人。
大川端＝現在の東京都を流れる隅田川（当時は大川）下流の右岸一帯。
星＝花火が開いた時に花弁の部分を形作る、火薬を練り固めたもの。

(ア) ――線1「悪口雑言の飛び交う中、小声で自問した。」とあるが、そのときの「弥兵衛」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 江戸っ子の心意気を茶屋や屋台の人々が失っていることに腹を立てていたが、自分たち以外の人を巻き込もうとすること自体が身勝手なのではないかと悩み始めている。

2 自分たちの考えを理解してくれない茶屋や屋台の人々に対して不満を抱いていたが、世の中の情勢以外にも協力を得られないわけがあるのではないかと思い始めている。

3 世の中のために団結することを渋る茶屋や屋台の人々に対していらだっていたが、怒りに任せて口汚く罵ってしまった自分たちは卑劣なのではないかと後悔し始めている。

4 飢饉に対する不満を漏らす皆に同調して世の中を憂いていたが、茶屋や屋台の人々が協力的でない原因を時世に求めることが間違っているのではないかと感じ始めている。

(イ) ――線2「言われた元太はむっつりとした顔になり、そっぽを向いて『はいよ。』と応じた。」とあるが、そのときの「元太」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 人のために奔走する「弥兵衛」とは違い、「鍵屋」の利益にしか興味がない「市兵衛」の視野の狭さは改めてほしいが、未熟な自分は意見できる立場ではないと諦め、投げやりになっている。

2 目の前の作業に専念するべきだという「市兵衛」の言葉を聞いて、感動を覚えるとともに、「弥兵衛」や自分たちの考え方が間違っていることが分かったものの、素直に認められずにいる。

3 「鍵屋」の一員である「市兵衛」ならば、自分のやり場のない思いを理解してくれるだろうと思っていたが、共感を得られなかったばかりか取り合ってももらえず、いらだちを覚えている。

4 「弥兵衛」の素晴らしさを「市兵衛」に訴えたところ厳しく批判され、ともに働いていくことに嫌気が差したものの、今まで「市兵衛」には世話になってきたため、思いを口に出せずにいる。

(ウ) ――線3「市兵衛はこちらの苦笑をちらりと一瞥し、それと分からぬくらいに頷くと、もそりと立ち上がって行灯に歩を進めた。」とあるが、そのときの「市兵衛」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 人に頼ることなく行いを振り返っている「弥兵衛」の姿を目にして大きな成長を認めつつ、見守ることしかできない寂しさを覚えてその場を離れようとしている。

2 皆の言葉から悩みを解決する手がかりを「弥兵衛」が見つけ出したと分かり、自分の考えは古びていて「弥兵衛」たちには受け入れがたいのだと痛感している。

3 自分の言動を「弥兵衛」が苦々しく感じていると気付いたが、何をするべきか見失っている「弥兵衛」を導くのは自身の役目だと信じて行動しようとしている。

4 振る舞い方を見つめ直してほしいという自分の思いに気付いた様子の「弥兵衛」を見て、口出しせずとも自ら答えを導き出すことができるだろうと感じている。

(エ) ――線4「あたしは正しかった。でも、間違ってたんだ。」とあるが、そのときの「弥兵衛」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 皆で協力すれば世の中は変えられるという考えは正論だったが、世の中のために尽くすよう人々に求めても具体策が浮かばなければ受け入れられなくて当然だと、自身の言動を後悔している。

2 苦しんでいる人々のために力を尽くすという信条は正しかったが、自らの考えを言葉にして伝えようとしなければ人々に理解してもらえないのは当たり前だと、自身の言動を反省している。

3 強い気持ちを持って苦しい状況を乗り越えるべきだという考え方は間違っていなかったが、自分の信念を押し付けるだけでは人々の賛同を得られなくて当然だと、自身の言動を省みている。

4 資金を援助してもらうとともに出店を募って現状を打破するという発想は良案だったが、人々をまとめる力がなければ手を貸してくれないのも無理はないと、自身の言動を振り返っている。

(オ) ――線5「うちが全部被る羽目になるかも、ですぜ。」とあるが、ここでの「市兵衛」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 大きな損害を受ける可能性があると分かった上で、それでも人々に寄り添って後押しすることを決断した「弥兵衛」の思いを理解し、覚悟の強さを試すように読む。

2 皆で逆境に立ち向かうという「弥兵衛」の信念を尊重しつつ、事態を軽視して人々の要求を安易に受け入れる姿に心配を募らせ、考えの甘さをたしなめるように読む。

3 皆と協同するだけではなく、ひとりでもできることを模索していく姿勢が必要だという「弥兵衛」の考えに共感を示すとともに、待ち受ける困難を気遣うように読む。

4 懸命に花火を作る姿を示すことこそが、人々に対する励ましになると気付いた「弥兵衛」を誇らしく思いながらも、受ける被害が大きいことを理解させるように読む。

(カ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 自身の正しさを考える中で、「市兵衛」を初めとした多くの人に支えられていることへの感謝の念を抱くとともに、世の中を立て直す覚悟を決めた「弥兵衛」のさまを、多彩な比喩を用いて描いている。

2 「鍵屋」の皆とのやり取りの中で、人の事情や気持ちに思いを至らせる大切さに気付いた「弥兵衛」が、世の中を明るくしようという決意を新たにするさまを、江戸っ子の言葉遣いを交えて描いている。

3 皆に自身の気持ちが伝わらないことに苦悩していた「弥兵衛」が、自らのあやまちに気付くことにより、上に立つ者としての自覚を持ち大きく成長していくさまを、「鍵屋」の皆の視点から描いている。

4 正しさに対する捉え方の相違から、衝突を繰り返していた「弥兵衛」と「市兵衛」が、お互いの本音を打ち明けて話し合うことを通して和解を迎えたさまを、回想を挟みこむことによって描いている。

問四　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ネット上の莫大（ばくだい）な情報へのアクセシビリティ（注）の拡大と、それらの情報の編集可能性の拡大は、私たちの知的生産のスタイルを大きく変えました。この変化の中で、今日、ネット情報をコピーしてレポートを作成する学生や、報道機関の記者が十分な取材をしないままネット情報を利用して記事を書いてしまい、後でその情報が間違っていたことがわかって問題となるケースなどが生じています。

こうした状況を受け、[1]レポートや記事を書く際、ネット情報の利用はあくまで補助的で、図書館に行って直接文献（ぶんけん）を調べ、現場へ足を運んで取材をすべきだと主張する人もいます。他方、そんなことをしていては変化に追いつけないので、ネット検索（けんさく）で得た情報をもとに書くことも認めるべき、さらに踏み込んで、書物や事典を参照して書くことと、ネット検索で得た情報をもとに書くことの間に本質的な差はないと主張する人もいます。ネット情報と図書館に収蔵されている本の間には、そもそもどんな違いがあるのでしょう。私の考えでは、両者には作者性と構造性という二つの面で質的な違いがあります。まず本の場合、誰が書いたのか作者がはっきりしていることが基本です。本というのは、基本的にはその分野で定評のある書き手、あるいは定評を得ようとする書き手が、社会的評価をかけて出版するものです。ですから、書かれた内容に誤りがあったり、誰か他人の著作の剽窃（ひょうせつ）（注）があったりした場合、責任の所在は明確です。その本の作者が責任を負うのです。

これに対してネット上のコンテンツ（注）では、特定の個人だけが書くというよりも、みんなで集合的に作り上げるという発想が強まる傾向にあります。作者性が匿名化（とくめいか）され、誰にでも開かれていることが、ネットのコンテンツの強みでもあります。そこでは複数の人がチェックしているから[2]相対的に正しいという前提があって、この仮説は実際、相当程度正しいのです。つまり、本の場合は、その内容について著者が責任を取るのに対し、ネットの場合は、みんなが共有して責任を取る点に違いがあるわけです。

二つ目の、構造性における違いですが、これを説明するためには、「情報」と「知識」の決定的な違いを確認しておく必要があります。一言でいうならば、「情報」とは要素であり、「知識」とはそれらの要素が集まって形作られる体系です。たとえば、[3]私たちが何か知らない出来事についてのニュースを得たとき、それは少なくとも情報ですが、知識と言えるかどうかはまだわかりません。その情報が、既存の情報や知識と結びついてある状況を解釈（かいしゃく）するための体系的な仕組みとなったとき、そのニュースは初めて知識の一部となるのです。

知識というのはバラバラな情報やデータの集まりではなく、様々な概念や事象の記述が相互に結びつき、全体として体系をなす状態を指します。いくら葉や実や枝を大量に集めても、それらは情報の山にすぎず、知識ではありません。情報だけでは、そこから新しい樹木が育ってくることはできないのです。そしてインターネットの検索システムの、さらにはＡＩの最大のリスクは、この情報と知識の質的な違いを曖昧にしてしまうことにあると私は考えています。

▼というのもインターネット検索の場合、社会的に蓄積（ちくせき）されてきた知識の構造やその中での個々の要素の位置関係など知らなくても、つまり樹木の幹と枝の関係など何もわからなくても、知りたい情報を瞬時に得ることができるわけです。つまり、ネットのユーザーは、その森のどのあたりがリンゴの樹（き）の群生地で、その中のどんな樹においしいリンゴの実がなっていることが多いかを知らなくても、瞬時にちょうどいい具合のリンゴの実が手に入る魔法を手に入れているようなものです。それで、その魔法の使用に慣れてしまうと、いつもリンゴの実ばかりを集めていて、[4]そのリンゴが実っている樹の幹を見定めたり、そこから出ているいくつもの枝の関係を見極めたりすることができなくなってしまうのです。

A　AIに至っては、ユーザーは自分がリンゴを探しているのか、オレンジを探しているのかがわからなくても、目的を達成するにはリンゴが適切であることをAIが教えてくれて、しかもまだ検索もしていない間に、適当なリンゴをいくつも探し出してきてくれるかもしれません。結局、私たちは検索システムやAIが発達すればするほど、自力で自分がどんな森を歩いているのかを知る能力を失っていく可能性があります。▲

本を読んだり書いたりすることが可能にするのは、これらとは対照的な経験です。少なくとも哲学や社会学、人類学、政治学、歴史学などの本に関する限り、5それらの読書で最も重要なのは、そこに書かれている情報を手に入れることではありません。その本の中には様々な事実についての記述が含まれていると思いますが、重要なのはそれらの記述自体ではなく、著者がそれらの記述をどのように結びつけ、いかなる論理に基づいて全体の論述に展開しているのかを読みながら見つけ出していくことなのです。この要素を体系化していく方法に、それぞれの著者の理論的な個性が現れます。

古典とされるあらゆる本は、そうした論理の創造的展開を含んでおり、よい読書と悪い読書の差は、その論理的展開を読み込んでいけるか、それとも表面上の記述に囚われて、そのレベルで自分の議論の権威づけに引用したり、自分との意見の違いを強調したりしてしまうかにあります。最近では、おそらくはインターネットの影響で、出版された本の表面だけをつまみ食いし、それらの部分部分を自分勝手な論理でつないで読んだ気分になって書かれるコメントが蔓延しています。著者が本の中でしている論理の展開を読み取れなければ、いくら表面の情報を拾い集めてみても本を読んだことにはなりません。

今のところ、必要な情報を即座に得るためならば、ネット検索よりも優れた仕組みはありません。この点で紙の本の読書は、ネットに敵わない。わざわざ図書館まで行って、関係のありそうな本を何冊も借りて一生懸命読んでみても、知りたかった情報に行き当らないというのはよくある経験です。見当違いの本を選んでしまったのかもしれません。借りてきた本を隅から隅まで読んでも、肝心なことは書かれていなかったということも起こり得ます。しかしネット検索ならば、はるかに短時間で、関係のありそうな本を読むよりもかなり高い確率で求めていた情報には行き当ります。B、ある単一の情報を得るには、ネット検索のほうが読書よりも優れているとも言えるのです。

それでも、6本の読者は一般的な検索システムよりもはるかに深くそこにある知識の構造を読み取ることができます。これが、ポイントです。調べものをしていて、なかなか最初に求めていた情報に行きつかなくても、自分が考えを進めるにはもっと興味深い事例があるのを読書を通じて発見するかもしれません。それに図書館まで行って本を探していたならば、その目当ての本の近くには、関連するいろいろな本が並んでいて、そのなかの一冊に手を伸ばすことから研究を大発展させるきっかけが見つかるかもしれません。このように様々な要素が構造的に結びつき、さらに外に対して体系が開かれているのが知識の特徴です。ネット検索では、このような知識の構造には至らない。なぜなら検索システムは、そもそも知識を断片化し、情報として扱うことによって大量の迅速処理を可能にしているからです。

（吉見　俊哉「知的創造の条件」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）アクセシビリティ＝情報の利用しやすさのこと。
剽窃＝他人の文章などを自分のものとして発表すること。
コンテンツ＝中身や内容物のこと。

(ア) 本文中の［A］・［B］に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　A　ただし　　B　また　　2　A　もし　　B　なぜなら
3　A　さらに　　B　したがって　　4　A　たとえば　　B　しかも

(イ) ――線1「レポートや記事を書く際」とあるが、その際の考え方について筆者が紹介した内容を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　本や取材内容に基づく必要性に言及する意見がある一方で、変化に対応するためネットの活用も認めるべきという考えもあるうえ、参照物があるという点では何を参考にしても同じという意見もある。
2　ネットの普及で情報が容易に入手可能となり、情報をコピーして使うことへの抵抗は少なくなったが、ネットと本では情報の量や質が大きく異なることに留意しなければならないという意見がある。
3　本に載っている情報は使い古されている可能性が高いので、最新情報をネットで入手することを推奨する意見もあれば、情報源が何であっても情報自体の価値に大きな差は生じないという意見もある。
4　補助的な資料にとどめさえすればネットの活用は認められるべきだが、完成度を高めるためには、本を調べたり現地を訪れたりすることによって集めた情報を再検証することが必要だという意見がある。

(ウ) ――線2「相対的に正しい」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　ネットの情報は、多数の利用者がともに作成し、確認できる性質を持っているため、ある程度の正しさが保持されているということ。
2　ネットの情報は、誰もが編集可能であり、訂正が迅速に行われる性質を持つため、本の情報と比べて正しさの度合いが高いということ。
3　ネットの情報は、誰でも閲覧でき、専門家の知恵が集結しやすい性質を持っているため、普遍的な正しさが保証されているということ。
4　ネットの情報は、複数の人で点検を行い、随時共有できる性質を持つため、本とは異なり誰にでも正しさの判断が可能だということ。

(エ) ――線3「私たちが何か知らない出来事についてのニュースを得たとき、それは少なくとも情報ですが、知識と言えるかどうかはまだわかりません。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　多くの情報の中から課題解決に役立つものを見つけたとき、初めて知識として皆と共有されるから。
2　新しく情報を得ても、活用して新しい何かを生み出さない限り知識としての価値を持たないから。
3　様々な情報が結びつき体系をなしたとしても、多くの人に知識として認識されるとは限らないから。
4　新たな情報は既知の事柄と統合され、系統立った状態となることで知識と呼べるようになるから。

(オ) ――線4「リンゴが実っている樹の幹を見定めたり、そこから出ているいくつもの枝の関係を見極めたりすることができなくなってしまう」とあるが、このリンゴのたとえが示す内容を説明した次の文中の［Ⅰ］・［Ⅱ］に入れる語句として最も適するものを、本文中の▼から▲までの中から、［Ⅰ］については六字で、［Ⅱ］については十字でそれぞれ抜き出し、そのまま書きなさい。

> インターネット検索によって、［Ⅰ］だけを得る習慣がついてしまうと、知識の体系的な仕組みや、その中にある［Ⅱ］を捉えることができなくなってしまうということ。

(カ) ――線5「それらの読書で最も重要なのは、そこに書かれている情報を手に入れることではありません。」とあるが、その理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 読書においては、情報を読み取ることに意味があるのではなく、著者の意見を踏まえた上で書かれている記述を結びつけ独創的な結論を導き出すことにこそ意味があるから。
2 読書においては、入手した情報そのものが重要なのではなく、書かれている事柄のつなげ方や論述の仕方などといった著者独自の論理展開を読み解くことこそが大切だから。
3 読書においては、収集した情報を吟味することが大切なのではなく、自分なりに著者の論述を読み込んだ上で自らの考えと結びつけて展開していくことにこそ価値があるから。
4 読書においては、読み取った情報自体に価値があるのではなく、情報同士の関連性や引用事例を分析することでわかる著者の個性豊かな表現技法を知ることこそが重要だから。

(キ) ――線6「本の読者は一般的な検索システムよりもはるかに深くそこにある知識の構造を読み取ることができます。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 読者は、本を読んだときに見当外れな情報しか発見できない場合も多くあるため、集めた事柄の関係性を推察して知識として蓄積する力が養われる可能性があるということ。
2 読者は、興味のある事例を調査する過程で正確かつ専門性の高い情報を得る機会に恵まれているため、難解な知識を習得して思考を深化させられる可能性があるということ。
3 読者は、無関係な複数の事例を収集した上で新たな関連性を見つけることを目的として本を読むため、多種多様な知識に対する理解度を高められる可能性があるということ。
4 読者は、本を読むことによって想定外の価値ある事柄や関連する他の事象に出会えることもあるため、単なる情報にとどまらない知識を得られる可能性があるということ。

(ク) 本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 本の情報が軽視されている現状を作者性という視点から指摘した上で、ネットに依存する危険性についても検索システムの特徴を説明する中で触れ、知識の構造を正確に捉える難しさを論じている。
2 本とは異なるネット情報の性質を説明するとともに、AIの発達に伴って失われていく能力にも触れた上で、検索システムを用いずに得られる知識の有用性について具体例を交えつつ論じている。
3 ネットと本の情報についてそれぞれ誰が責任を負うのか述べるとともに、情報と知識の違いを説明した上で、読書による知識の構造化を検索システムを用いた情報処理と比較しながら論じている。
4 誰にでも開かれているために要素のつながりが捉えやすいというネット情報の特徴を述べた上で、検索システムが情報を断片化して扱うことの弊害に触れながら、読書がもたらす効能を論じている。

問五　中学生のAさん、Bさん、Cさん、Dさんの四人のグループは、国語の授業で行われるモーダルシフトをテーマにしたディベートに向け、日本の貨物輸送の現状について調べ、話し合いをしている。次の**表**、**グラフ1**、**グラフ2**と文章は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

表

輸送方式ごとの国内貨物輸送量　（万トン）

調査年度＼輸送方式	自動車	船舶（せんぱく）	鉄道	航空	総輸送量
平成 5 年度	582,154	52,884	7,926	86	643,050
平成 10 年度	581,988	51,665	6,037	102	639,791
平成 15 年度	523,408	44,554	5,360	103	573,426
平成 20 年度	471,832	37,871	4,623	108	514,432
平成 25 年度	434,575	37,833	4,410	103	476,922
平成 30 年度	432,978	35,445	4,232	92	472,747

国土交通省「国土交通白書」より作成。

Aさん　今回のディベートのテーマであるモーダルシフトとは、様々な問題を解決するために、ある輸送方式を他の輸送方式に転換することです。日本の貨物輸送の課題に対する取り組みの一つとして、国が推進しているものです。

Bさん　私たちは今回のディベートでは、モーダルシフトを進めることに賛成という立場で意見を述べることになっています。まず、モーダルシフトの利点をまとめるために、日本の貨物輸送の現状を確認しておきましょう。

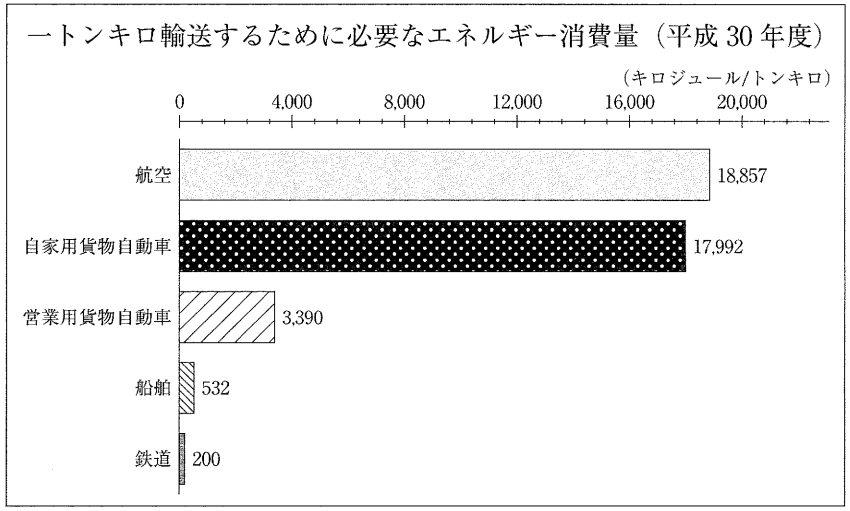
Cさん　では、**表**を見てください。国内貨物の輸送量を輸送方式ごとにまとめたものです。これを見ると、［　　］ことがわかります。

Dさん　また、日本の貨物輸送に関して、地球温暖化や大気汚染といった環境問題や、労働者不足などの問題が生じていることもわかっています。

Aさん　このような問題を解決に導くためにモーダルシフトを進めることは有効であるという方向で、ディベートの準備を進めましょう。

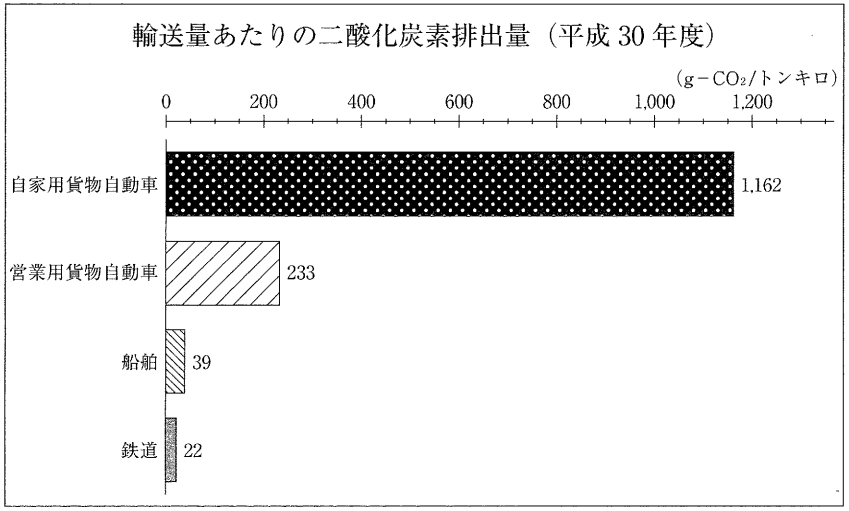
Bさん　ここで**グラフ1**を見てください。一トンの貨物を一キロ運ぶために必要なエネルギー消費量を、輸送方式ごとにまとめたものです。これを見ると、航空や自家用貨物自動車のエネルギー消費量

グラフ1



日本内航海運組合総連合会「内航海運の活動・令和２年度」より作成。

グラフ2



国土交通省ホームページより作成。

は、他の輸送方式と比べて非常に多いことがわかります。

Cさん　つまり、船舶（せんぱく）や鉄道には、それらと比べてエネルギー消費量を抑えられるという利点があるのですね。貨物自動車よりも船舶の方が大きいのでエネルギー消費量も多いと思っていましたが、そうではないとわかりました。

Aさん　そうですね。では、モーダルシフトを進めていくと、他にはどのような効果が期待できるでしょうか。

Dさん　**グラフ2**を見てください。輸送量あたりの二酸化炭素排出量を輸送方式ごとにまとめたものです。自家用貨物自動車の二酸化炭素排出量は、他の輸送方式と比べて非常に多くなっています。

Cさん　営業用貨物自動車の二酸化炭素排出量は、自家用貨物自動車と比べると少ないものの、船舶や鉄道と比べると多いことがわかります。

Bさん　二酸化炭素は、地球温暖化や、それに伴う異常気象の発生といった問題の要因と言われています。二酸化炭素排出量が少ない船舶や鉄道に輸送方式を転換することは、このような問題を解決する手立ての一つとなりそうですね。

Dさん　これまでの話をまとめましょう。**グラフ1**と**グラフ2**から読み取った内容から、モーダルシフトを進めていくと、［　　］という効果があると考えられます。

Bさん　しかし、モーダルシフトは思ったほど進んでいないようです。国がモーダルシフトの推進を表明しているにもかかわらず、期待どおりには進展していない理由として、貨物自動車は他の輸送方式と比べて小回りがきき、便利であることがあげられます。

Cさん　ディベートでは、その点が反論として出てきそうですね。しかし、ただ利便性を追求するのではなく、生じている問題を認識し、何ができるかを考えて行動することが大切だと思います。

Dさん　そのためにも、それぞれの輸送方式の特徴を理解した上で、適している輸送方式を考えて転換していくことが求められそうですね。

Aさん　ここまでは、モーダルシフトを進めることの意義について、環境問題の解決という切り口で話し合ってきました。他の問題における効果についても検討するとともに、反論を退ける際に必要となる資料を集めながら、引き続き準備を進めていきましょう。

(ア)　本文中の［　　］に入れるものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1　平成30年度は平成5年度と比べて、国内貨物の「総輸送量」が三分の二以下になっている
2　平成30年度の国内貨物の「総輸送量」に占（し）める「自動車」の割合は、九割以上である
3　平成30年度の「鉄道」の貨物輸送量は、「船舶」の貨物輸送量の十分の一以下である
4　平成30年度は平成5年度と比べて、「航空」の貨物輸送量が一割以上減少している

(イ)　本文中の［　　］に適する「Dさん」のことばを、次の①～④の条件を満たして書きなさい。

①　書き出しの［モーダルシフトを進めていくと、］という語句に続けて書き、文末の［という効果があると考えられます。］という語句につながる**一文**となるように書くこと。
②　書き出しと文末の語句の間の文字数が**三十字以上四十字以内**となるように書くこと。
③　**グラフ1**と**グラフ2**からそれぞれ読み取った内容に触れていること。
④　「環境問題」という語句を、そのまま用いること。

（問題は、これで終わりです。）